

改訂の序

おとなの中には、子ども時代の自分が必ず、いろいろに様子を変えて存在しているものだとは思っている。これは医師としても同じことなので、小児診療のなかで、子どもとつき合うときには、おとなの診療をしているときとは全く違った立ち位置にいる自分に気が付くことと思う。

自分自身が過ごしてきた時間のなかで悩み苦しむ小さな者に対してもつであらう共感のようなものが、小児診療にあたろうとするモチベーションとなる。

そんな思いで40年間、小児科医を続けてきた。

この度、尊敬する倉辻忠俊先生が2004年に編まれた「いざというとき役に立つ小児診療のコツ」の改訂版を出すことになり、羊土社の編集の方々と仕事をさせていただいた。

初版発行から8年が経過しており、改訂にあたっては、初版の構成を活かしながらも、全面的なアップデートを行った。また、重要ポイントやコツをまとめた「ポイント」や「診療のコツ」を加え、より役立つものになるよう心がけた。一息ついてもらうべく、コラムもところどころに加えてもらい、内容の充実したものとなった。初版からページ数が50ページ以上増えたことから、そのことが伺えると思う。

本書は主に研修医や他科の若手医師に向けて書かれているが、小児診療にかかわるすべての医師に役立つ入門書として、初版に負けない読みやすさ、使いやすさになっているものと自負している。

2012年10月

細谷亮太

初版の序

臨床医になろうとする者には、人間が生まれ、育ち、成熟し、老化し、死亡するまでの一生の過程の実際を現場で学び、理解し、それにかかわっていく（On the job training）ことは非常に重要である。しかし一般に小児科は、「患者がすぐ泣いて診察がやりにくい」、「患者が小さく検査が難しい」、「検査の正常値や薬の量が年齢によって異なって難しい」、などの理由をあげて敬遠される傾向にある。実は、小児は発育・発達の途上にあり、未来に向かって日々前進しているので、客観的に患児を観察し、また検査値を眺めていくと、同じ名前の疾患でも成人とは大きな違いがあり、非常にやりがいのある領域であることがわかってくる。

本書は、救急外来診療に役立つように、主に研修医や他科の若手医師に向けて書かれたもので、先に出版したレジデントノート2002年2・3月号（Vol. 3 -No. 6）特集をもとに新しい原稿を加えてまとめたものである。そのために時に応じてすぐに利用しやすいように心がけた。従来の教科書のような臓器や病因別に系統だって詳述したものではなく、日ごろ接することの多い症状や訴えから、どのように患児を観察し、診断に迫っていくかを語っている。

構成は、まず小児診療の進め方と考え方を取り上げた。診療の基礎、医療面接、診察などの原則とその理由を理解する。次に成長・発達の特徴を大まかに理解し、特に新生児乳児の特徴を覚えていただく。さらに院内感染の基礎を理解し、小児保健を頭に入れる。これらは病児を診察するときばかりでなく、町を歩いているときにもすれ違った子どもを見て、何カ月、何キログラムくらいかな？ 予防接種は何が済んでいるかな？ 親とはどういうふうに話し合うかな？ などと習慣づけて訓練する。第2章は症状別に、特に救急外来で接することの多いものを選んである。第3章には見落とすと重大事になる可能性を含んでいる「気をつけたい疾患」をあげた。第4章には小児特有の手技を具体的に記した。子どもに負担をできるだけかけないように種々の手技ができるように練習を積むとよい。1～3カ月の間に一通り重要な疾患を学べるように編集してあるので、暗記するくらい何度も読み臨床研修に十分に役立ててほしい。

2004年4月

倉辻忠俊